武道学研究の道標

□筑波大学武道学研究室の沿革

筑波大学武道学研究室は、本学の前身である東京教育大学に武道学科が設置されるに伴い、「武道各種目独自の理論研究は、それぞれの講座内で行なうが、その基礎的総合的理論の体系は独立して研究しなければならない」との理由から新たに設けられた武道論講座に始まる。

武道論講座は、昭和 42 年（1967）4 月 1 日に設置された武道学科の中で、先ずは大滝忠夫教授が「武道論」の授業を開始し、昭和 44 年（1969）に渡邊一郎助教授が専任として加わり「武道史概説」「武道伝書演習」「武道資料購読」の講義を開始したことにより、講座としての体裁が整えられていった。昭和 48 年（1973）に教務員から専任講師に昇任された中林信二先生が指導陣に加わり、「文武両道」の学風を形成していく。その後、大学としては昭和 48 年（1973）に総合大学として開学した筑波大学に移行し、武道学科自体は昭和 52 年（1977）の東京教育大学閉学をもってなくなったものの、武道論は筑波大学の体育専門学群ほか教育組織における体育・スポーツ学の一領域として位置付けられ、平成 25 年（2013）に領域名称を「武道論」から「武道学」に改称した。創設から現在に至るまでおよそ半世紀の歴史を重ねつつ、日本の武道学を牽引し、多くの優秀な研究者・教育者を輩出してきている。

研究の内容としては、大きく武道史と武道思想に大別され、さらに近年はターミノロジー（専門用語）研究や調査の手法を用いた質的研究なども加わり、学群（学部）から博士後期課程にいたるまで一貫した研究・教育体制が整えられている。また、昨今急速にグローバル化が進む学術界において、ジャパノロジー（日本学・日本研究）の一環としても海外から高い評価を受けており注目度が高い。

歴代教授陣としては、大滝忠夫先生、渡邊一郎先生、中林信二先生、入江康平先生、藤堂良明先生らが名を連ね、現在は酒井利信教授・大石純子教授の陣容で研究・教育活動を行っている。

（武道ワールドより抜粋 https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/%e4%bb%a3%e8%a1%a8%e3%83%97%e3%83%ad%e3%83%95%e3%82%a3%e3%83%bc%e3%83%ab/%e7%a0%94%e7%a9%b6%e5%ae%a4/）

□武道学研究の方法論

近年、今現在の事象について、調査の手法を用いた質的研究を援用するような研究スタイルも確立されつつあるが、武道学研究室では伝統的に過去の武道文化に関する事績を研究対象とし、その根幹となる方法論としては、歴史的資料（史料）を読み込んで文章の行間を読んでいく文献学的手法を用いてきた。どう行間を読むかということが勝負であり、行間を読む感性を磨いていかなくてはいけない。ここが武道学研究の粋であり、見せ所でもある。そのためには良い論文や著書等の研究成果をたくさん読んで、そのセンスを吸収

し、多くの史料を、じっくりと、時間をかけることを惜しまず読み込んでいくことが重要である。文献学においては、徹底的に史料と向き合う覚悟が必要である。

方法論としては、史料の重要と思われる部分について、単に黙読するだけではなく、これを書き写すことが有効である（高橋進先生直伝のカード法）。書くことによって史料の内容に集中でき、結果として自分の持つ感性によって行間を読むことができるようになる。

次に、自分の発信する研究成果については、文字になれば人目に触れるものであり、自分の顔と同じものと思って、丁寧に、かつ慎重に推敲を重ねて完成させなくてはならない。引用文の写し間違いや、誤字脱字については最も注意しなくてはならず、たった一つの不注意が露呈しただけで全てが否定され、せっかくの研究成果が認められず低く評価されることになる。

特に武道学研究室では、言葉、文章を大切にしてきた伝統がある。何回も声に出して音読し、自分で読んでみて、読み詰まるところというのは論旨に無理がある、あるいは文章の流れがおかしいということであり、一回も滞ることなく通読できるようになるまで文章を推敲する。文章の流れは、人文科学の生命線である。

□生成ＡＩの活用について

近年、生成ＡＩが開発され急激に世の中に浸透してきている。時代の流れに沿って、このツールを活用することは禁じないが、一方で安易にこれに依存する傾向がみられることは否めず、将来を担う有望な人材の健全な育成を促すために対策は必要である。このことより、先ずは筑波大学の生成ＡＩ活用のガイドライン（別添）をよく理解すること。

その上で、武道学研究室としては、文献学の矜持を継承すべく、独自に以下のようなガイドラインを設定する。

・生成ＡＩの利便性に依存してしまうと、自ら行間を読む感性を醸成する学修を阻害する恐れがある。このことより、最初からＡＩを利用してテキストの概要を把握することは厳禁とする。最初にＡＩの理解をイメージとしてもってしまうと、自ら考え、自らの感性で行間を読むことを止めてしまう恐れがある。少なくとも史料の重要な箇所を書き写すなど、自分の力でテキストに向き合い、これを複数回、少なくとも十回以上続けてもなお理解が難しいところ、わからない箇所についてはＡＩを活用するなど、あくまでも補助的ツールとして利用すること。

・生成ＡＩの出力内容に誤りがあることはシステムの原理上避けられないため、その内容を鵜呑みにせず、原典にあたって自分の力で裏を取っていくこと。

・補助的ツールとして生成ＡＩを利用することは問題ないが、ゼミの発表資料等では、自らの思考により導出された部分と、生成ＡＩにより提示された部分を分けて記述する。後者については赤字等で色分けして記述すること。

令和７年７月　酒井利信